

第4回横須賀美術館評価委員会資料

横須賀美術館評価制度

目標－評価項目－評価指標（案）について

目次

はじめに	3
概要	4
I アンケートによる自己認識	5
II 目標—評価項目—評価指標の提案	10
①美術を通じた交流の促進	10
②質の高い展覧会の開催	12
③やすらぎの場の提供	14
④知的好奇心の育成と充足	16
⑤福祉活動の展開	17
⑥学校との連携	18
⑦市民との協働	20
⑧子どもたちへの美術館教育	23
⑨優れた美術品の収集・保管	24

はじめに

横須賀美術館は2007年4月に開館して以来2ヵ年近くを経過し、その間、幸いにして市内外の多くの方々にご来館いただいています。しかし、この好調の原因は、この美術館が他に抜きん出て素晴らしいから、では必ずしもなく、新しい施設としての話題性に拠るところが大きいと考えられます。

今後、ながく愛される美術館であり続けるためには、現場にいる美術館職員が、現状に甘んじることなく、自ら問題意識を持って運営および事業の改善を目指すことがぜひとも必要です。

横須賀美術館では、開館に先立つ2007年3月から、外部委員による美術館評価委員会を組織し、美術館の運営および事業の評価の方法について話し合ってきました。

そこではっきりしたのは、美術館の業務内容が外部から見えにくいという現状でした。美術館職員は、美術館の運営・事業の内容について、これまでも改善の努力を怠りなくおこなってまいりましたが、それを客観的に示すということについては不十分だったといわねばなりません。今後は、どなたにもわかりやすい基準によって、客観性の高い自己評価をしてゆくばかりでなく、その内容について、評価委員会の活動を通じて一般に公開してゆきたいと考えます。

なお、今回お示しする評価の枠組みは、いまだ完成されたものとはいえませんが、今後の活動のなかで定期的に見直してゆくものです。

概要

評価の方向性の指針となる「ミッション」については、今回まとめたものとしては提示しない。

それに相当するものとして、美術館設置の根拠である「美術館条例」第1条は「美術を通じたさまざまな交流の機会を促進し、市民の美術に対する理解と親しみを深め、もって文化の向上を図るため、本市に博物館法（昭和26年法律第285号）に基づく美術館を設置する。」としている。また、「市民の美術に対する理解と親しみを深め」するための具体的な活動の方針として、「美術館活動の基本方針」を平成18年3月に策定している。

（別紙参照）

これら、開館に先立って検討した方針に加え、開館後にアンケート等によって把握しえた当館に寄せられている期待（顧客ニーズ）を指針のひとつとする。

以上のことから、具体的な目標として下記の9項目を設定する。

（根拠）

- | | |
|---------------|---------------------|
| ①美術を通じた交流の促進 | ←「美術館条例」 |
| ②質の高い展覧会の開催 | ←「美術館基本計画」 |
| ③やすらぎの場の提供 | ←「アンケート」 |
| ④知的好奇心の育成と充足 | ←「美術館活動の基本方針」 |
| ⑤福祉活動の展開 | ←「美術館活動の基本方針」 |
| ⑥学校との連携 | ←「美術館活動の基本方針」 |
| ⑦市民との協働 | ←「美術館活動の基本方針」 |
| ⑧子どもたちへの美術館教育 | ←「美術館活動の基本方針」 |
| ⑨優れた美術品の収集・保管 | ←「美術館基本計画」「美術館基本構想」 |

これらの目標の達成度合いを測るため、①②③の目標については量的な評価項目を、④～⑨の目標については質的な評価項目を設ける。

量的な評価項目については、現状値に基づいた達成目標を示し、委員会の承認を得たい。質的な評価項目については、事務局による自己評価結果を示し、委員会で2次評価をしていただきたい。

I アンケートによる自己認識

2007年12月の清宮質文展以降、展覧会ごとに配布式のアンケートを実施している。書式は別紙の通りである。

このなかで、「横須賀美術館は、あなたにとってどんな存在ですか」という質問を設け、記述していただいた。この回答は、横須賀美術館が来館者にどのように認識されているか、を知る手がかりとなるはずである。回答を独自に分析したところ、下記のような結果となった。

1. 対象

→清宮質文展、若林奮展、中村岳陵展、あそびじゅつくる展、ファイニンガー展、日本彫刻の近代展で行った配布式アンケート。

	会期	サンプル数	記述あり	記入率
清宮質文展	19年11月23日～12月16日	607	427	70.35%
若林奮展	20年2月16日～3月16日	386	282	73.06%
中村岳陵展	4月1日～5月11日	548	330	60.22%
あそびじゅつくる展	5月24日～7月21日	273	164	60.01%
ファイニンガー展	8月2日～10月5日	631	351	55.63%
日本彫刻の近代展	10月28日～12月21日	271	100	36.90%
	計	2716	1654	60.90%

2. 記述内容の要素

記述内容を要素に分解し、独自に分類した。一件の記述内容のなかに複数の要素が含まれている場合には、それぞれの要素ごとに集計した。

(1) 肯定的なもの (1414件)

【動因】 肯定的な記述が何についてなされているか。

〈環境〉 風景、眺め、海、緑、ロケーション、立地・・・・・・・・・・372件 (26.3%)

〈建築〉 建物、美術館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・350件 (24.8%)

〈展示・作品〉 絵、企画、所蔵品・・・・・・・・・・・・・・・・117件 (8.3%)

→肯定的な記述全体のうち、それぞれ四分の一程度が〈環境〉あるいは〈建築〉についての言及である。〈展示・作品〉についての記述は1割以下にとどまっている。

〈環境〉〈建築〉が横須賀美術館の特長として認知されているといえる。

*これ以外の主語には「スタッフ」「レストラン」などもあるが、特定できないものが多い。

【内容】 どのような点について、肯定的にとらえているか。

〈心的充足〉 心がやすらぐ、いやされる、気分転換になる・・・・・・・・405件

〈親近感・期待〉身近、気軽、また来たい、がんばって・・・・・・・・・・299件
〈美しさ〉美しい、きれい、すてき、おしゃれ、明るい・・・・・・・・・・226件
〈新しさ・意外性〉さわやか、今までにない、意外に、おどろいた・・・・132件
〈感動〉感動した、すばらしい、すごい、最高・・・・・・・・・・100件
〈楽しさ・豊かさ〉おもしろい、充実している、たくさんある・・・・・・・・85件
〈快適性〉静か、ゆったり、落ち着いた、広々とした・・・・・・・・・・90件
〈知的興味・好奇心〉興味深い、勉強になる、一度来てみたかった・・・・57件
〈その他〉(漠然と) よい、抽象的な表現、暗喩などを含む・・・・・・・・112件
→やすらぎ・いやしなど〈心的充足〉について記述する人が3割程度と最も多く、〈親近感・期待〉を示すもの、〈美しさ〉についての記述がそれに次ぐ。

【クロス集計】

→【動因】別にどんな【内容】の記述が多いのかを分析した。

*「動因」「内容」ともに複数選択・該当なしがあるため、「全体」は合計とならない。

*1件の記述内容が複雑である場合に、「動因」と「内容」の関連しないことがあるが、集計ではそのケースを度外視するものとする。

例)「風景が美しく、建物にはびっくりした」→〈環境〉〈建築〉〈美しさ〉〈新しさ・意外性〉に各1ポイント入る。

	環境	建築	展示・作品	全体
心的充足	70 (18.8%)	70 (20.0%)	22 (18.8%)	405 (28.6%)
親近感・期待	50 (13.4%)	37 (10.6%)	36 (30.8%)	299 (21.1%)
美しさ	76 (20.4%)	120 (34.3%)	24 (20.5%)	226 (16.0%)
新しさ・意外性	24 (6.5%)	54 (15.4%)	10 (8.5%)	132 (9.3%)
感動	42 (11.3%)	35 (10.0%)	10 (8.5%)	100 (7.0%)
楽しさ・豊かさ	13 (3.5%)	18 (5.1%)	19 (16.2%)	85 (6.0%)
快適性	28 (7.5%)	28 (8.0%)	5 (4.3%)	80 (5.6%)
知的興味・好奇心	6 (1.6%)	10 (2.9%)	5 (4.3%)	57 (4.0%)
その他	4 (1.1%)	27 (7.7%)	13 (11.1%)	112 (7.9%)
全体 (100%)	372 (100%)	350 (100%)	117 (100%)	1414 (100%)

→〈環境〉では〈美しさ〉について言及する人が最も多く、〈心的充足〉〈親近感・期待〉が次ぐ。

→〈建築〉では〈美しさ〉について言及する人が最も多く、〈心的充足〉〈新しさ・意外性〉が次ぐ。

→〈展示・作品〉では〈親近感・期待〉について言及する人が最も多く、〈心的充足〉〈美しさ〉〈楽しさ・豊かさ〉が次ぐ。

→主語を明示せずに(総合的に)〈心的充足〉に言及する人が多い。

→〈展示・作品〉について〈親近感・期待〉〈楽しさ・豊かさ〉を示す割合が高い。

例)「企画によってはまた来たい」7件

「いつもよい企画展をしている」5件

「このような企画展をまたしてほしい」4件

「所蔵品が充実している」8件

→〈建築〉について〈新しさ・意外性〉に言及する割合が高い。

(2) 否定的なもの・要望 (369 件)

否定的な記述の場合、「動因」と「内容」は固定していることが多いため、別には集計していない。

〈展示・作品〉 作品・展示方法に関するもの	86 件 (23.3%)
・ガラスに映り込みがあり見にくい	18 件
〈アクセス〉 交通の便、駐車料金、交通・館内案内	84 件 (22.8%)
・駐車料金が高い、無料サービスが短い	12 件
・案内がわかりにくい	12 件
〈税金の無駄遣い〉 存在否定、建物・人件費がかかりすぎる	52 件 (14.1%)
〈親しみ・やすらぎを感じない〉 おちつかない、一度で十分	28 件 (7.6%)
〈人的対応〉 スタッフの対応のしかたが悪い	32 件 (8.7%)
〈建物・施設〉 白すぎる、明るすぎる、トイレが狭い	26 件 (7.0%)
〈解説不足〉 解説がほしい、字が小さい	19 件 (5.1%)
〈観覧料〉 観覧料が高い、展示替中は料金を安くせよ	14 件 (3.8%)
〈休憩所不足〉 いすが少ない、レストランと別にカフェがほしい	12 件 (3.3%)
〈レストラン〉 高い、混んでいて入れない	10 件 (2.7%)
〈うるさい〉 靴音・話し声がうるさい、うるさい客には注意せよ	7 件 (1.9%)
〈広報不足〉 もっと宣伝すべき	8 件 (2.2%)
〈撮影〉 建物の写真を撮りたい	3 件 (0.8%)
〈美術館らしさ〉 美術館らしくない	3 件 (0.8%)
〈清掃〉 清掃は閉館時にすべき	3 件 (0.8%)
〈その他〉	42 件 (11.4%)

→ 〈展示・作品〉については、多様な意見・要望がある。その中で、「ガラスへの映り込みがあり作品が見にくい」という苦情は比較的まとまっている。外光を採り入れる構造、内壁が白いことなどが原因として考えられ、対策を講じているところである。

→ 〈アクセス〉については、「遠い」という意見が多いが、これはどうしようもないので、交通案内などをよりわかりやすくする等で対策をするほかない。また、駐車料金が高い、駐車場が使いにくいなどの意見もここに含まれている。

→ 〈税金の無駄遣い〉美術館の存在そのものを否定的にとらえるものや、「建物がぜいたく」、「スタッフが多すぎる」なども含む。

(3) 横須賀美術館への認識

以上の分析から、横須賀美術館に対する認識は多くの人にとって次のようだと考えられる。

- ・美しい周辺環境と建築が特色である。
- ・やすらぎ、いやしなど心的充足を得られる場である。
- ・身近な、親しみの持てる美術館である。
- ・アクセスが不便なのが難点。

II 目標—評価項目—評価指標の提案

九つの「目標」(①～⑨)について根拠を示しつつ、その達成度合いをはかるための「評価項目」(a. b. c....)と「評価指標(達成目標)」を提案する。

①美術を通じた交流の促進

【根拠】

「美術館条例」第1条は「美術を通じたさまざまな交流の機会を促進し、市民の美術に対する理解と親しみを深め、もって文化の向上を図るため、本市に博物館法(昭和26年法律第285号)に基づく美術館を設置する。」としている。

a. 年間観覧者数

企画展・所蔵品展に関わらず、展覧会を見た人の合計。

開館年度の前半を度外視すれば、企画展ごとの一日平均観覧者はおおむね300人台で安定しつつある。企画展を開催しない間の所蔵品展観覧者数をあわせ、年間10万人を達成目標としたい。

(表：観覧者数・来館者数(展覧会別)、観覧者数・来館者数(月別))

b. 年間来館者数

当館では、本館正面入口、ペントハウス、谷内六郎館入口の3箇所オートカウンターを設置し、人の出入りを計測している。公表している「来館者数」は、このうち谷内六郎館入口を除く2箇所から本館内に入ってきた人の数の合計である。

展覧会場に入らない利用者もふくむ来館者全てということになるはずである。しかし、観覧者数の2倍を超えているため、これをそのまま実数と信じることはできない。おそらく、来館者の多くが建物の内外を複数回往復しているものと考えられる。

展覧会の内容というよりも、天候などの不確定要因によって大きく左右されているようである。したがって場所としての横須賀美術館の「にぎわい」の度合いを示すものとお考えいただきたい。

開館年度は度外視することとし、現状値から見て年間20万人を達成目標としたい。

(表：観覧者数・来館者数(展覧会別)、観覧者数・来館者数(月別))

c. 市民/全体の比率

来館者アンケート回答者における市民/全体の比率は、開館当初は約7割と高かったが、半年をかけて減少し、特別な条件のない限り25～30%程度で推移している。

開館年度は、新しい市の施設としての美術館そのものを見学しようとする市民の実数が多かったこと、また、当初は留置式アンケートのみだったため、市政に関心の深い市民の回答が比較的多かったことが、市民率漸減の理由として考えられる。

(表：来館者の居住地域)

東京から 100 キロ圏内にあり、横浜から 1 時間以内で来られる横須賀美術館は、首都圏の他の美術館と競合関係にあると考えられる。一定の来館者数を維持するためには、今のところ近隣の大都市からの来館者ニーズを無視することはできない。競合するほかの美術館と競争することのできる、魅力ある事業を展開してゆくことが求められている。いっぽう、市内の顧客は今のところ比較的少ないと思われる。きめ細かいアプローチで美術館を体験する機会をつくり、少しずつでも市民のなかから美術館の支持者を増やしていかななくてはならない。

そのうえでの市民率の増加は喜ばしいことだが、結果を急ぐことは事業の質の低下につながる恐れがある。したがって当面は 40%を目標としたい。

d. パブリシティの状況

アンケートからは、認知媒体として「雑誌・新聞」を挙げる人の率は「友人などの紹介」に次いで 2 位であり、少なくないことがわかるが、また 20%台後半から 15%以下へと低落する傾向が見て取れる。広告費をじゅうぶんに使えない状態で、マスコミ取材等の果たす役割は大きい。開館年度を過ぎ、マスコミからの注目度が減少する状況があるため、より積極的な広報戦略を展開すべきである。

評価指標としてはアンケート「認知媒体」中の「雑誌・新聞」の比率を注視することとし、20%を目標としたい。努力課題としては、雑誌・新聞等への掲載状況（件数）を挙げる。

e. アクセス満足度

平成 21 年度よりアンケート項目に加えて調査したい。(別紙 2)

これまでのアンケート結果から、多くの来館者がアクセスの不便（遠い、バス便が少ない、案内がわかりにくい、駐車料金が低い）を感じていることがわかった。これを満足度で示し、評価の対象とすることにより、改善の根拠とし、また効果の確認を行う。

②質の高い展覧会の開催

【根拠】

「美術館基本計画」（平成12年）では、企画展の内容、開催頻度について以下のように方針を定めている。

①自主企画展

(1) 広く内外の美術に目を向けた美術館独自の企画展示
年2回程度、1～2ヶ月/回

(2) 横須賀・三浦半島に関連する企画
年1回程度、1～2ヶ月/回

②巡回展等の共同企画展

年2回程度、1～2ヶ月/回

③横須賀・三浦半島を拠点とする現代作家企画展

年3～4回程度、1～2ヶ月/回

a. 企画展集客率（企画展目的の来館者/サンプル数）

当館に足を運ぶ動機として、開館直後は施設そのものへの関心が大きく、予想を超える動員へとつながったと考えられる。しかし、それらは恒久的なもの（いつでも同じように存在し、したがって一度見ればよいもの）と認識されており、リピーターの獲得にはつながりにくい。開館から日がたつにつれて、ますます来館の動機としての企画展の重要性は増してくる。交通の不便さをおしても来館する動機となりうるような、魅力のある展覧会を開催し続ける必要がある。

（表：来館目的（展覧会別））

来館の目的として「企画展」を挙げる人の割合を、現状値に照らして、つねに50%超であることを目標としたい。

b. 企画展の満足度

c. 所蔵品展の満足度

d. 谷内六郎館の満足度

多くの人々が来館しても、満足を与えられなければ館の印象は悪くなり、その人がリピーターとならないばかりでなく、マイナスの宣伝効果を生む恐れすらある。一時のキャンペーン等によって表層的な集客を試みるよりも、実際に足を運んでくれた人に確実に満足を与えられる質の高いサービス（事業）を提供することのほうがより重要である。美術館の主たる事業である展覧会が、十分な満足を与えられているかについて検証するために、来館者アンケートの中で満足度調査を行った。ここでいう満足度とは、「満足

できる展覧会だった」との設問に、5段階評価で5、4をつけた人の回答者に占める割合を指す。

(表：展覧会ごとの満足度)

清宮展以降、調査の対象となった企画展はいずれも高水準の満足度を示した。所蔵品展は、55～68%の間でバラつきがあり、傾向・要因はよくわからない。谷内六郎館は、高い満足度を保っている。

現状値からみて、企画展 70%、所蔵品展 65%、谷内六郎館 80%を達成目標としたい。

e. リピート率 (複数回来館者／回答者)

美術館の価値が認められれば、おのずからリピーターが育つはずである。

アンケート結果から、リピーターの増加は、企画展の充実と大いに関係すると考えられる。来館回数別に来館の目的を見ると、企画展を目的とする来館者の割合は来館回数が増えるにつれて高くなっており、4回以上来館者では8割近くが企画展が目的と答えている。また、当館の特色である谷内六郎館や、所蔵品展を目的として来館する人が、来館回数が増してもほぼ一定に保たれていることは、これらが「何度も訪れたいもの」として評価を得ていることを示している。

開館して日の浅い当館にとってリピーターの割合が少ないことは当然であるが、幸いなことにやや増加してゆく傾向にある。

新規の来館者があまり減っても良いとはいえないので、どの程度までリピーター率が上昇すれば健全な状態であるのかは、なんともいえないところであるが、当面は50%を目標としたい。

(表：来館回数比率の推移・来館の主な目的 (来館回数別))

③やすらぎの場の提供

【根拠】

来館者アンケートの自由記述でもっとも多かったのは、「心がやすらぐ」「いやされる」など、心的充足についての感想だった。多くの人にとって、美術館は日常から離れ、心の柔軟性を取り戻す場所として期待されていることがわかる。また、権威主義的でなく、開放感を持たせた建築のコンセプトからか、身近で、親しみのある美術館との印象をもたれてもいる。こうした期待に応えていくため、来館者にきもちよく利用してもらえよう館内の環境整備、人的対応スキルの向上をはかりたい。

a. 館内アメニティ満足度

美術館に寄せられる苦情としては、事業内容よりも施設・設備に関するもののほうが多い。即対応できるものは対応しているが、ハード面で容易に変えられないこと、正反対の意見が両方あって、どちらに従えばよいかわからないことなど、検討を要する課題も多い。

どのような要望を優先的に解決すべきであるかをはかるために、新規に館内アメニティ（快適性）満足度の調査を行いたい。

すでに「休憩所・いすが足りない」「飲食できる場所がほしい」「館内の音がうるさい」「館内が明るすぎる」「トイレが狭い・足りない」などの苦情があることがわかっている。これらについて、どの程度の人が不満を持っているのかを調べる。

形式は項目ごとの満足度調査とし、1年間の調査後に達成目標を設定する。（別紙）

b. スタッフ対応の満足度

c. ミュージアムショップの満足度

d. レストランの満足度

e. 図書室の満足度

受付・監視スタッフは、来館者に直に接するため、苦情を寄せられることも多い。また、ミュージアムショップ、レストランおよび図書室は、美術館を訪れる楽しみの幅をひろげ、ゆったりと過ごすために重要な施設である。これら付帯施設、スタッフ対応の満足度を見ていくと、回答数自体少ないものの、おおむね高い数値を示している。

（表：スタッフ・付帯施設の満足度）

スタッフ対応は美術館の印象を左右する重要なポジションであるため、さらに80%の達成を目標としたい。ショップ満足度は十分であり、これを維持する80%を目標としたい。レストランは、アクセスの悪さなど経営的に必ずしも有利とはいえない条件のなかで健闘している。70%を当面の達成目標としたい。

図書室は利用者数は必ずしも多くないが、リピーターの利用率が高いと考えられ、地域に密着した美術館であるためになくってはならない存在になりつつある。少数を対象とし

たきめ細かいサービスによって、さらに高い満足度を得られるよう努力すべきと考えられるので、現状値から見てやや高めであるが 80%を達成目標としたい。

f. 観音崎公園への滞在時間平均

当館を含む観音崎公園への滞在時間をアンケートによって調査したところ、その平均は 3 時間弱であった。四季折々に異なった表情を見せる観音崎公園の自然について、より深く知ってもらえれば、当館の魅力をより豊かなものにすることができるだろう。観音崎観光の拠点としての役割を果たすよう努力することによって、平均滞在時間を 3 時間以上とすることを当面の達成目標としたい。

④知的好奇心の育成と充足

【根拠】

「美術館活動の基本方針」の第1項

・知的好奇心の育成と充足「現代に開かれた美術館」

「美術の歴史や美術と社会情勢の相互関係などを伝えながら、現代に生きる来館者の知的好奇心を育成、それを満たすことを目指します。」

a. 講演会・アーティストトークなど

展示内容への理解をいっそう深める機会として、関連した内容の講演会、アーティストトークなどを、外部より講師を招聘して開催している。

(表：一般向け講演会・アーティストトークなど)

b. 一般向けワークショップなど

参加型の活動としてワークショップを開催している。

(表：一般向けワークショップなど)

c. 学芸員によるギャラリートーク

企画展の開催中は、関連事業の一環として、企画展に関するギャラリートークを行っている(通例では隔週)。その他の期間についても、開館当初より、毎週1回、木曜日午後2時から、30分前後のギャラリートークを継続実施している。ただし、平日の開催では、参加者が集まらず成立しないことがあるため、週末の開催について検討しているところである。

その他、団体観覧者等から作品解説等の希望があれば、学芸員が対応している。

(表：ギャラリートーク・団体対応一覧)

d. 作品解説カードの設置

所蔵作品の主要なものについて、平成19年度に48種の作品解説カード(見本参照)を制作し、所蔵品展の会場で配布している。今後もタイトル数を増やしてゆきたい。

e. 学芸員による論文など

調査・研究の成果を展覧会図録や、その他の印刷物を媒体として発表している。

(表：学芸員による論文など)

⑤福祉活動の展開

【根拠】

「美術館活動の基本方針」の第2項

・福祉活動の展開「すべての人に開かれた美術館」

「年齢や障害の有無などに関わらずさまざまな人が集い、コミュニケーションできる豊かな場となるために、精神的な充実を目指して福祉活動を展開していきます。」

a. 福祉とアートをテーマとした講演会の開催

福祉とアートをテーマとした講演会等を年1～2回開催している。

b. 障がい児を対象としたワークショップ

障がい児を対象としたワークショップを開催している。参加無料。事前申込制。

c. 障害者施設、高齢者施設など各種団体の受け入れ

障害児特別支援学級、養護学校など、要望に応じて対応している状態。おおむね喜んでいただいている。しかし、車椅子での集団行動ではご不便を感じさせてしまう場合も多い。ハードの改善は難しいので、対応に工夫が必要と考えている。

d. 託児サービス

子育て中の方にも、美術館をゆつくりと楽しんでいただくため、無料の託児サービスを実施している。実務はNPOに委託。年間24回募集を行っている。スケジュールは、できるだけ講演会やワークショップ開催の日程に合うよう調整している。

応募者は1組から2組程度と少ない場合がほとんどで、まったく応募がない場合も多い。広報は、イベントに伴う実施の場合には展覧会チラシ等で告知しているが、定期開催については、広報紙のほか、館内でのパンフレット配布にとどまる。利用者はおおむね満足している。

e. 対話による鑑賞補助の実施

要望に応じて実施しており、数例の実績がある。HPやパンフレットを通じて申し込みを促している。実施している館はまだ少数であるため、おおむね喜んでいただいている。対応する学芸員のスキルをさらに向上させる必要がある。

⑥学校との連携

【根拠】

「美術館活動の基本方針」の第3項

・学校との連携「地域に開かれた美術館」

「学校と連携し、鑑賞教育の充実を目指します。また、鑑賞の場としてだけでなく、社会見学や美術以外の授業での利用など、創造的な活動の場として、美術館活動を実施していきます。」

a. 小学校美術館鑑賞会の受け入れ

横須賀市では、市立小学校全48校の6年生を対象に「小学校美術館鑑賞会」を行っている。横須賀美術館では下記の日程でこの鑑賞会を受け入れ、学芸員によるガイダンスや展覧会ガイド、ワークシートを用いた補助プログラム等を通じて児童の鑑賞活動を支援した。また、来館した展示室への入室前に、児童・生徒向けパンフレット「美術館のやくそく」を配布し鑑賞マナーについても啓発を行った。

(表：小学校美術館鑑賞会の実施日・来館校・内容・生徒数)

b. 中学生のための美術鑑賞教室

横須賀市立中学校全24校を対象に、「中学生のための美術鑑賞教室」を開催した。夏期休暇中で、かつ「アルフレッド・ウォリス展」の会期中に、学校ごとの開催日を設定し、学校単位で参加者を募った。実施にあたっては、借り上げバスによる学校・美術館間の送迎を行い、参加した生徒に対しては、学芸員によるガイダンス、展示解説のほか、ワークシートによって鑑賞活動を支援した。

c. 職業体験受け入れ

市立中学校2年生の職業体験について、各中学校の依頼に基づき受け入れを行った。学芸員の業務の一部として「ギャラリートーク」などを演習課題とするほか、美術館施設の紹介、軽作業の体験をしている。

(表：職業体験の受け入れ日・中学校名・受け入れ生徒数)

d. インターンシップ受け入れ

横須賀・三浦地区県立高等学校インターンシップについて、横須賀・三浦地区県立高等学校からの依頼により受け入れを行った。学芸員の業務の一部として「ギャラリートーク」「展示案作成」などを演習課題とするほか、美術館施設の紹介、軽作業の体験をしている。

(表：インターンシップの受け入れ日・高校名・受け入れ生徒数)

e. 教員研修受け入れ

各学校の依頼に基づき教員の研修受け入れを行った。「ギャラリートーク」などを演習課題とするほか、美術館施設の紹介、軽作業の体験をしている。

(表：教員研修の受け入れ日・学校名・受け入れ教員数)

f. 出前授業

各校の依頼に基づき、「出前授業」を行った。「出前授業」は、学芸員が各校に出向き、画像等を見せながら作品紹介や施設説明等を行うものである。要望に対応する形でおこなっており、2008年度は実績がなかった。

(表：出前授業の実施日・学校名)

g. 校外活動、研究活動の受け入れ

市立小・中・養護学校の校外活動及び研究活動について、受け入れを行った。

(表) 校外活動等の受け入れ日・学校名・内容・参加者数

⑦市民との協働

【根拠】

「美術館活動の基本方針」の第4項

・市民との協働「市民に開かれた美術館」

「美術館での市民の活躍を期待します。生涯学習の場として美術館を利用する市民の交流も視野に入れながら、市民との協働をはかります。」

【経緯】

横須賀美術館のボランティア活動の開始は、開館8ヵ月前の2006年8月である。ここで、「開館記念イベント企画実施ボランティア」が組織され、2007年6月まで活動を行った。

2007年度は、新たに「サポートボランティア」「プロジェクトボランティア」の2種についてメンバーを募集し、研修及びイベント企画等の活動を行った。なお、2008年度もそれぞれ活動を継続している。

a. 開館記念イベント企画実施ボランティア

開館記念イベントを企画実施するボランティアを公募により組織した。

募集：2006年7月

任期：2006年8月～2007年6月

資格：18歳以上

登録：28名

活動内容：開館記念イベントの企画及び実施。途中で2班に別れ、班ごとに「ガリバーキャンバス」「顔◎レンガ」の2種のイベントを行う。

(表) 活動の記録 *2006年度活動分を含む

会議18回開催

活動実績

「すかび隊 presents! 美術館開館記念イベント 布とレンガまつり」の企画・実施

①第1弾 絵の具の海を泳ごう! ガリバーキャンバス

日時：4月28日～30日 11時～15時

概要：海の広場に12×20メートルの布を広げ、筆や刷毛のほか水風船、ひしゃくなどを使って参加者が自由な彩色を行った。3日間で3枚の布を使用、そのまま6日まで海の広場に展示した。

参加者：423名

②第2弾 顔◎レンガ

日時：5月1日～6日 11時～12時/13時～14時/15時～16時(各回定員32名。各

日とも 10 時から整理券を配布)

概要：横須賀の近代建築遺産にちなみ、レンガの表面に絵を描くイベント。参加者はワークショップ室で顔をモチーフとする自由な彩色を行った。描き終えたレンガは、海の広場に「横須賀美術館・YOKOSUKA」となるよう決められた区画内に配置し、6月9日まで展示した。

参加者：650名

b. サポートボランティア

目的：社会教育施設として市民の生涯学習を支援し社会貢献の可能性を広げる。

募集：2007年9月（プロジェクトボランティアと同時募集）

資格：18歳以上

登録：17名

活動内容

作品解説や学校・団体等の受け入れ補助。

美術館が主催するワークショップ等での補助。

*いずれも登録制。補助が必要な催事のたびに美術館から呼びかけを行う。

活動記録

12月8日・9日 ワークショップ「美術館にツリーをつくろう」ツリー設置、飾り付け補助。

12月16日 障害児をもつ保護者の会のワークショップ補助。

このほか、下記の日程で研修を行った。講師は横須賀美術館学芸員。

(研修日)	(テーマ)
12月13日	「明治末期」
12月27日	「大正」
2008年1月24日	「昭和 戦前の洋画」
2月7日	「昭和 戦中の洋画」
2月28日	「建物見学」
3月6日	「昭和 戦後の洋画（具象）」
3月20日	「昭和 戦後の洋画（抽象）」
*なお2008年度にも継続して以下の研修を行った。2008年4月3日/2008年4月17日	「近代日本の彫刻」/「近代の日本画」

c. プロジェクトボランティア

目的：市民の交流の場として市民協働を推進し、美術館活動の拡大を図る。

募集：2007年9月（サポートボランティアと同時募集）

資格：18歳以上

登録：19名

・活動内容

アートをテーマにしたイベントの企画および実施

*プロジェクトボランティアは活動日によって土曜班、月曜班の2班に分かれ活動した。

（土曜班）

2008年4月の開館1周年記念イベント及び2008年冬期イベントに向けた企画及び準備。

【2007年度】

会議8回開催。

【2008年度】

会議3回開催。

開館1周年記念イベント「空想水族館」（2008年5月3日～6日。ワークショップ室+海の広場）開催。

「海の広場のメリークリスマス」（11月29日・30日・12月6日。ワークショップ室+海の広場）開催。

（月曜班）

2008年夏・秋期イベントに向けた企画立案。

【2007年度】

会議8回開催。

【2008年度】

会議 回開催。

「どろんこキャンバス」（8月20日。ワークショップ室+海の広場）開催

「みんなで月夜の音楽会つくる・あそぶ・きく」（10月13日。ワークショップ室+海の広場）開催。

⑧子どもたちへの美術館教育

【根拠】

「美術館活動の基本方針」の第5項

・子どもたちへの美術館教育「未来に開かれた美術館」

「子どもたちがより豊かに成長し、美術館に親しみを持つようになることを目標に、一般来館者でもある子どもたちへ向けて美術館教育を実施していきます。」

a. 子ども向けワークショップ

【2007年度】

3回開催、のべ186名参加

【2008年度】

9回開催、のべ372名参加

b. アーティストと出会う会（中学生対象）

【2007年度】

2回開催、計86名参加

【2008年度】

2回開催、計87名参加

⑨すぐれた美術品の収集・保管

【根拠】

「美術館基本構想」（平成11年3月）では、作品収集の方針について以下のように定めている。

作品収集の方針

- ・横須賀・三浦半島にゆかりのある作家の作品。
- ・横須賀・三浦半島を題材とした作品。
- ・「海」を描いた作品。
- ・日本の近現代を概観できる作品。
- ・その他、上記に関連のある国内外の優れた作品。

a. 作品収集の状況

作品購入基金への補填が途絶えており、平成 年度以来作品の購入はしていない。作品の受入にあたっては、年1～2回の選定評価委員会を開催して審査、承認を得ている。

【2007年度】

49点の寄贈。（別表参照）

【2008年度】

46点の寄贈。5点の寄託。（別表参照）

b. 保存修復の状況

【2007年度】

（1）収蔵庫・保管庫内の環境調査

下記のとおり収蔵庫・保管庫等の保存環境調査を行った。

調査期間：平成20年2月12日（火）～3月11日（火）28日間

調査実施者：イカリ消毒株式会社

内容：昆虫類調査（歩行性昆虫・タバコシバンムシ・ジンサンシバンムシ・カツオブシムシ類）、菌類調査、気相調査

調査結果：①昆虫類調査：荷解室内でチャタテムシ類を2匹捕獲したのみで、収蔵庫・保管庫・前室では捕獲されなかった。

②菌類調査：収蔵庫1・収蔵庫2・保管庫で空中浮遊菌（一般性真菌・好稠性真菌）を確認。付着菌についても各所で確認。

③気相調査：収蔵庫1・保管庫について酸性的環境にある。収蔵庫2・収蔵庫前室は清浄環境にある。

(2) 修復

【2007 年度】

- ・ 矢崎千代二作品の修復 (1 件 53 点)

内容：展示可能なようにクルーセル吹き付けをし、パステルの固着強化を行った。

【2008 年度】

- ・ 高橋由一作品の修復 (1 点)

内容：表面ワニス層の調整

(3) 額装等

【2007 年度】

- ・ 額装 4 件 19 点
- ・ 軸装 10 点
- ・ 新規額装 3 点
- ・ 低反射ガラスへの入れ替え 6 点
- ・ マット装丁 48 点

【2008 年度】

- ・ 新規額装 3 件・38 点
- ・ 額入替 1 件・40 点

c. 所蔵作品の貸出状況

【2007 年度】

17 件・80 点を貸出 (別表参照)

【2008 年度】

9 件・65 点を貸出